

今週の T2 経済レポート



2023 年 4 月 28 日号

■■■ 市場ウオッチ ■■■

<先週のマーケットを振り返る>

先週、「今週は本来ですと急落調整を警戒する週が予想されます。今週(4/24~4/28)の相場を占う『RU-RD 指標』の 4 月 14 日週が-3.3%と 3 週間振りにマイナス圏に陥っていることから急落調整を警戒する週となります。ただ、来週(5/1~5/5)の相場を占う 4 月 21 日週が+31.4%と、前の週と異なり、再びプラス圏に浮上していることから急反発する週となります。ただ、日本のミニ SQ が 14 日、米国のミニ SQ が 21 日に終了したことで、以前から『今回(23 年 3 月 20 日週-57%→3 月 27 日週 62.9%)のように同指標が 2 週間で「下限ゾーン」から「上限ゾーン」へと乱高下したのは、22 年 3 月 28 日週+41.2%→4 月 4 日週-76.9%以来で、やはり年度末の株価吊り上げの「株価操縦」が行われていたことを証明したかたちです。実際、当時の日経平均を振り返ると、22 年 3 月 28 日週高値 28281 円から 5 月 9 日週安値 25688 円まで-9%と、年度末を境に下落しています。ちなみに、21 年の年度末は、21 年 4 月 5 日週高値 30208 円→5 月 10 日週安値 27385 円まで-9%と 22 年と同じかたちとなっています。』と指摘してきたように反動安が表れやすい時間帯であることは忘れないことです。一方、3 月 10 日の米地銀シリコンバレーバンク(SVB)の経営破綻を起点とする世界的な金融不安は、米銀行預金残高が 3 月 15 日週-1745 億ドル→22 日週-1257 億ドル→29 日週-1110 億ドル→4 月 5 日週+606 億ドル→4 月 12 日週-762 億ドルと、11 週間振りに止まった預金流出で一旦、安心感が広がりましたが、再び、預金流出が始まっています。先週ご紹介した、『4 月 5 日、米金融最大手の JP モルガン・チェースのジェイミー・ダイモン最高経営責任者(CEO)は株主に宛てた年次メッセージで「危機はまだ終わっていない。危機が終わった後も影響は何年も続く」、「市場が見込む景気後退の確率は高まっている。2008 年の(金融危機の)ようなものではないが、現在の危機がいつ終わるかは分からない。」と述べたことが報道されましたが、4 月 14 日金曜日の同社の決算報告では『米国経済に「嵐の雲」が迫っている』と投資家に警告しています。』との指摘が早くも表れたかたちです。以前から何度も指摘してきたように『米国 M2(マネーサプライ)が 1929 年の大恐慌以来のマイナスとなって起きている金融危機』であることを忘れないことです。また先週、『3 月半ばには債券恐怖指数 MOVE 指数が 2008 年以来の高水準に達し、株式と債券の恐

怖指数の格差が 15 年ぶりの大きさ』を指摘しましたが、『この VIX 指数の不自然さは米国市場で行われている VIX 指数を利用した「相場操縦』が原因の一つであり、『2018 年に起きた「ボルマゲドン」のようなボラティリティーの急上昇を招きかねない』状況だけでなく、08 年「リーマンショック」前に似た債券・株式市場であることを示唆しています。一方、『日経平均とのほぼ一致指標である「買い(レーティング 1 と 2)」「売り(レーティング 3 と 4)」「銘柄比率』が 23 年 3 月 3 日週+28.6%→3 月 10 日週+44.3%→3 月 17 日週+18.6%→3 月 24 日週-51.4%→3 月 31 日週-20.0%→4 月 7 日週-4.3%→4 月 14 日週-8.6%→4 月 21 日週+1.4%と、23 年 3 月 24 日週に「-40%の下限ゾーン」に急落後、5 週間振りにプラス圏に浮上しています。一方、株価底入れサインに重要な同指標の移動平均は、23 年 3 月 3 日週+29.8%→3 月 10 日週+33.6%→3 月 17 日週+28.8%→3 月 24 日週+15.0%→3 月 31 日週+7.1%→4 月 7 日週+2.6%→4 月 14 日週-3.6%→4 月 21 日週-10.7%と、2 週連続でマイナス圏に陥っています。株価底入れサインとなる「-40%の下限ゾーン」実現にはまだまだ時間がかかりそうで、その原因は無駄な「株価操縦」をいつまでも続けているためです。日米の株価操縦のなか、2023 年 4 月 20 日ブルームバーグニュースは『米株強気派、過去 100 年の景気後退を度外視ー相場急落は時間の問題か』において、『1929 年以降に米国が陥ったリセッション全てに目を向けると、株式相場の急落は起きるかどうかわずなく、いつ起きるかが問題だということが示唆される。過去約 100 年に、景気が縮小局面に入った後で新たな底値を付けるのを回避したという例は一度もない。相場が底打ちするのは、リセッションが始まってから平均で 9 カ月後である。アンドルー・ガースウェイト氏らクレディ・スイス・グループのストラテジストは「リセッションが始まる前に相場が底を付けたことはこれまで一度もない」と 18 日付レポートで指摘。24 年 1-3 月(第 1 四半期)までに米国がリセッションに陥る確率を 80%とみている。』と報じています。現在の日米の相場操縦で過去 100 年の米国の相場の法則を覆せるとも思っているのでしょうか。

今週は、経済指標では、国内は、4 月 25 日に 3 月全国百貨店売上高、28 日に 3 月有効求人倍率、4 月都区部消費者物価指数、3 月鉱工業生産、3 月商業動態統計、3 月住宅着工統計、一方海外では、4 月 24 日に独 4 月 IFO 企業景況感指数、25 日に米 4 月消費者信頼感指数、米 3 月新築住宅販売、26 日に米 3 月耐久財受注、27 日に米 1-3 月期 GDP 速報値、欧 4 月ユーロ圏消費者信頼感指数、28 日に米 3 月個人消費支出(PCE)コアデフレーター、欧・ユーロ圏 GDP 速報値(1-3 月)、4 月米ミシガン大学消費者マインド指数、などが予定されています。27 日発表の米 1-3 月期国内総生産(GDP)速報値は前期年率+2.0%と、2022 年 10-12 月期の同+2.6%から成長率は鈍化する見通し。また、28 日発表の米 3 月個人消費支出(PCE コア価格指数)は前年比+4.5%と、前回実績+5.0%をやや下回る見通し。このほかのイベント・トピックスとしては、国内は、4 月 27 日に日・日銀政策委員会・金融政策決定会合(~28 日)、28 日に植田日銀総裁会見、海外では、4 月 27 日にトルコ・中央銀行が政策金利発表、などが予定されています。』とコメントしました。

RU-RD指標と日経平均（週末終値）



4月3日週	4月10日週	4月17日週	4月24日週
¥27,518.31	¥28,493.47	¥28,564.37	¥28,856.44
-57.0%	62.9%	33.3%	-3.3%

先週の日経平均は、高値 28879 円(4 月 28 日)・安値 28241 円(4 月 27 日)と推移、3 週連続で前半安・後半高の強いかたち。先週は、米経済指標の下振れによる景気後退懸念や米地銀のファースト・リパブリック・バンクの株価急落が投資家心理を悪化させ下値目標値を達成しましたが、週末の注目イベントだった植田総裁の就任後初となる日本銀行の金融政策決定会合で政策の現状維持が決定されると為替の円安が加速するなか、不自然な上値追いで年初来高値を更新、週間ベースでは+292 円高と 3 週連続上昇して終了しています(先週予告していた上値メド 29161 円～29744 円(+2%かい離)//下値メド 28248 円～27683 円(-2%かい離))。日経平均の『大台替えと時間の物理学的法則』では、小刻みの大台替えて、4 月 11 日に 28000 円大台替えて仕切り直しが入り、14 日に 28500 円大台替えてカウントダウンの上昇局面入りに 3 日間、従って、17 日までに 29000 円大台替えてカウントダウン継続を狙う時間帯に入りましたが実現せずに時間切れ。29500 円大台替えて仕切り直し、逆に、28000 円大台割れで下落スタートとなります。中期の方向を示す月ベースでは、3 月 31 日に 28000 円大台替えて仕切り直しが入りました。29000 円大台替えて

カウントダウンの上昇局面、逆に、27000 円大台割れで下落スタートとなります。また長期の方向を示す月ベースの大台替えの法則では、3 月 28000 円大台替えで仕切り直しが入りました。29000 円大台替えで仕切り直し、逆に、27000 円大台割れで下落スタートとなります。これで短期→、中期↑、長期↑となり、中期・長期の強含みは変わりませんが、短期が強含みから方向感なしに変わり、上昇しやすいながらも目先は乱高下しやすいかたちに変化しました。当局が「〇〇の一つ覚え」のように、2021 年から続ける 3 月・9 月の年度末株価だけを高くする「株価操縦」を 23 年も行われ、過去、2 年はその「相場操縦」後、いずれも約 9%下落しています。その時間帯に入っていますが、23 年も「相場操縦」の反動安が起きるかが注目されます。

日経平均を左右する NY ダウは、高値 34104 ドル(4 月 28 日)・安値 33235 ドル(4 月 26 日)と推移、前の週と異なり、前半安・後半高の強いかたち。先週は、米コンファレンスボードが発表した 4 月消費者信頼感指数が 101.3 と、3 月 104 から予想以上に鈍化し、22 年 7 月来の低水準となって景気減速懸念が強まり、24 日発表した米銀ファーストリパブリックの第 1 四半期決算で約 1000 億ドル(約 13 兆 4000 億円)の大規模な預金流出があったと明らかになり金融システム不安が再燃、さらに米銀行規制当局が FRB からの融資を受けられなくなる(可能性がある)評価格下げを検討していると伝わり同行株が急落、相場の下落に拍車をかけ下値目標値を達成しましたが、予想を上回る決算を背景にした不自然な大幅高で切り返して、週間ベースでは+290 ドル高と、前の週の 5 週間振りの小幅反落を挟んで、ここ 6 週間で+2237 ドルの急反発で終了しています(先週予告していた上値メド 34271 ドル~34956 ドル(+2%かい離)//下値メド 33700 ドル~33026 ドル(-2%かい離))。NY ダウの『大台替えと時間の物理学的法則』では、短期の大台替えで、3 月 27 日に 32500 ドル大台替えで仕切り直しが入り、3 月 31 日に 33000 ドル大台替えでカウントダウンの上昇局面入りに 4 日間、4 月 3 日 33500 ドル大台替えでカウントダウン継続に 3 日間、従って、7 日(休場のため週明け 10 日)までに 34000 ドル大台替えでカウントダウン継続を狙う時間帯に入りましたが、実現せず時間切れ。34500 ドル大台替えで仕切り直し、逆に、33000 ドル大台割れで下落スタートとなります。中期の方向を示す月ベースでは、時間切れとなっていました。4 月 13 日に 34000 ドル大台替えで仕切り直しが入りました。35000 ドル大台替えでカウントダウンの上昇局面、逆に、33000 ドル大台割れで下落スタートとなります。月ベースでは、3 月に 33000 ドル大台替えで仕切り直しが入り、4 月に 34000 ドル大台替えでカウントダウンの上昇局面入りに 1 ヶ月、従って、5 月までに 35000 ドル大台替えでカウントダウン継続を狙う時間帯に入りました。逆に、33000 ドル大台割れで下落スタートとなります。これで短期→、中期↑、長期↑と、長期の強含みに中期も強含みに変化したことで上昇しやすいかたちとなりましたが、短期の方向感がないため目迫は乱高下しやすいかたちに変りありません。債券の恐怖指数がリーマンショック時の水準まで急上昇しているにもかかわらず、未だ株式市場は楽観的にみえているのは金融危機を気づかせないために株価を吊り上げて「相場操縦」を行っているためかと思われます。株式と債券の今回のような解離は 08 年リー

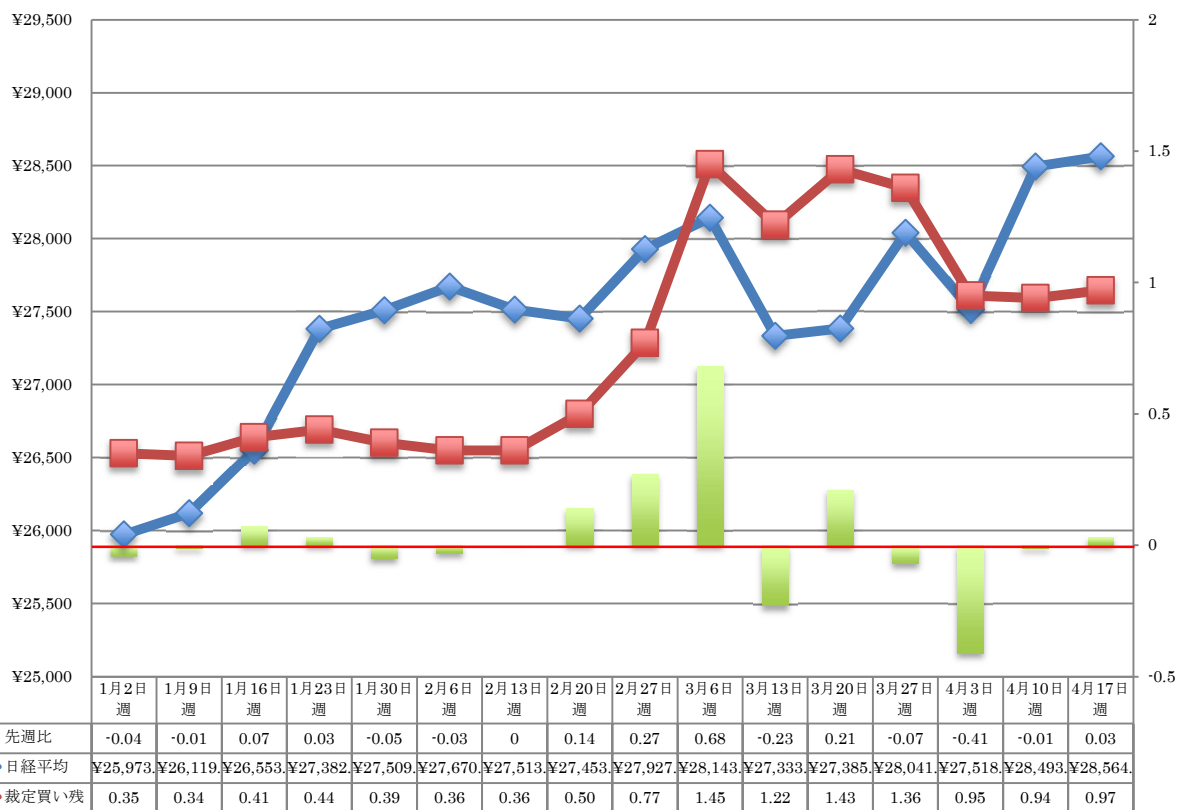
マンショック以来で、過去の例ではその解離は長続きせず、債券の恐怖指数に株式の恐怖指数がさや寄せしています。

一方、為替は、ドル・円が 136.56 円～133.00 円(先週予告していた上値メド 136.08 円～137.44 円(+1%かい離)//下値メド 133.36 円～132.02 円(-1%かい離))と推移、上値・下値両目標値を達成する乱高下の激しい週でしたが、実質 5 週連続で円安・ドル高、ドル・ユーロは、1.1095～1.1099(先週予告していた上値メド 1.1099～1.1209(+1%かい離)//下値メド 1.0879～1.0770(-1%かい離))と推移し、上値・下値両目標値を達成しない中途半端な動きが 2 週連続で続きましたが、実質 9 週連続のドル安・ユーロ高。また、ユーロ円は、150.51 円～146.26 円(先週予告していた上値メド 149.47 円～150.96 円(+1%かい離)//下値メド 146.27 円～144.80 円(-1%かい離))と推移し、上値・下値両目標値を達成する乱高下の激しい週でしたが、実質 5 週連続で円安・ユーロ高。前の週のユーロ>ドル>円が実質 5 週継続し、5 週連続で円安修正のかたちです。ドイツ政府が 2023 年の成長見通しを上方修正したこと、欧州中央銀行(ECB)による 0.5 ポイントの追加利上げ観測が広がる一方、米銀ファーストリパブリックが第 1 四半期決算で預金の大幅減を明らかにしたことをきっかけに金融システム不安が再燃したことから、一時 1.1095 ドルまでユーロ高・米ドル安に振れましたが、4 月 28 日発表のユーロ圏 1-3 月期域内総生産は市場予想を下回り、リスク選好的なユーロ買いは縮小したかたちです。また、日銀が金融政策の現状維持を全員一致で決めたこと受け円は全面安、対ユーロで 150 円台に乗せ、2008 年 9 月以来の安値を更新したほか、対ドルでも 7 週間ぶり安値を付けています。

<裁定買い残・裁定売り残>

4 週間振りに増加。前の週まで 3 週連続減少しましたが、21 年 3 月 8 日週-7088 億円以来、2 年振りの 4000 億円超の減少を含め、3 週間で 4915 億円減少しています。やはり 3 月の年度前後に表れていることから「相場操縦」の実態を表しています。実際、「裁定買い残」をみても 3 月 6 日週に 1 兆 4586 億円と、半年前の昨年 9 月 19 日週以来の 1 兆 4000 億円台に急増、毎度お馴染みの半期に一度の年度末の株価だけを高くする「株価操縦」が 2023 年も行われ、4 月に入りその反動安の時間帯に入っているかと思われ。当局はこのような実態を誤魔化す無意味な「株価操縦」をいつまで続けるつもりなのでしょうか。一方、「裁定売り残」は、前の週比-207 億円の 4079 億円と、前の週と異なり、減少し、ここ 3 週間は毎週増減を繰り返しています。昨年を振り返ると、約 1 年前の 22 年 3 月 7 日週以降、「裁定売り残」の残高は 1000 億円台～5000 億円台で増減を繰り返し、この「裁定売り残」を利用して株価をレンジ相場に止めてきたことが伺えます。そして、3 月・9 月の半期に一度の年度末には「相場操縦」に「裁定買い残」を利用しているだけということが誰の目にも明らかです。当局はこの行動を無意味だと感じていないのが不思議です。

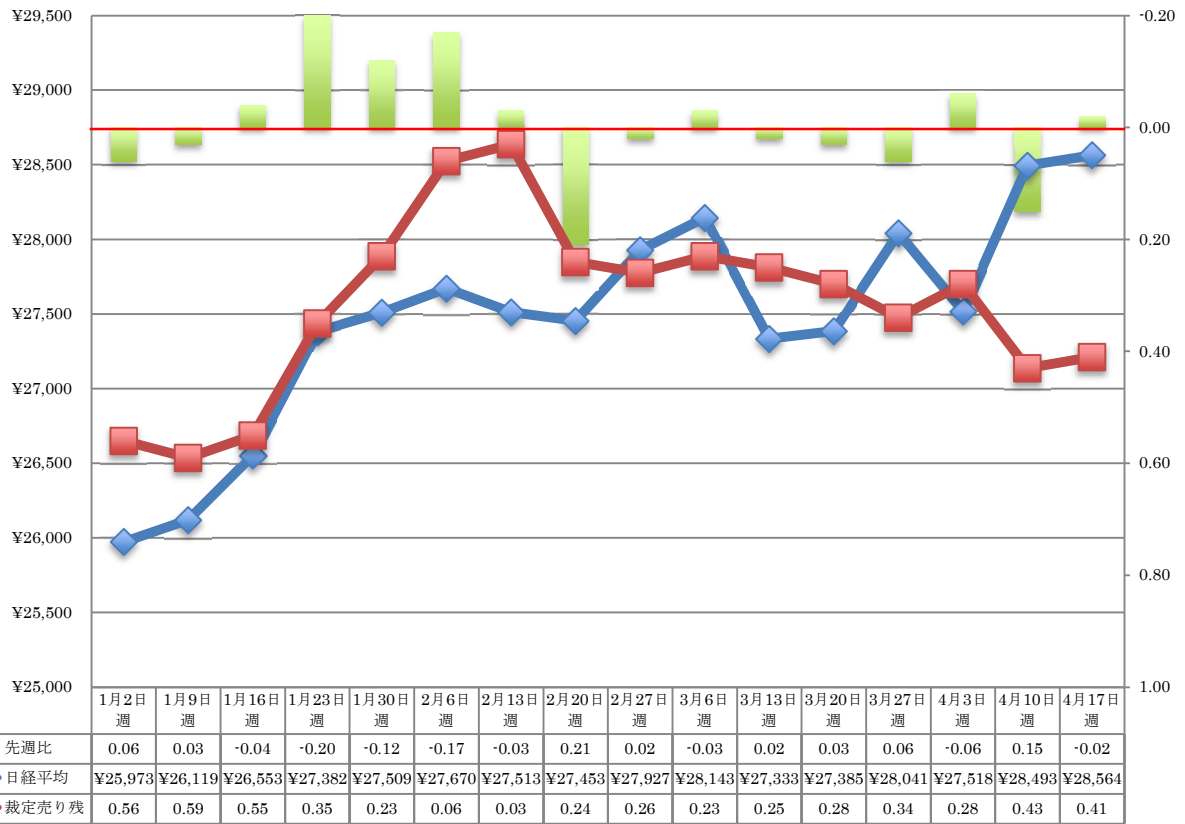
裁定買い残と先週比



3月27日週	4月3日週	4月10日週	4月17日週
¥28,041.48	¥27,518.31	¥28,493.47	¥28,564.37
1.36	0.95	0.94	0.97
-0.07	-0.41	-0.01	0.03

単位:兆円

裁定売り残と先週比



3月27日週	4月3日週	4月10日週	4月17日週
¥28,041.48	¥27,518.31	¥28,493.47	¥28,564.37
0.34	0.28	0.43	0.41
0.06	-0.06	0.15	-0.02

単位:兆円

<今週のマーケットの見通し>

今週は本来ですと急反発の可能性の高い週と予想されます。今週(5/1~5/5)の相場を占う『RU-RD 指標』の4月21日週が+31.4%と、前の週と異なり、再びプラス圏に浮上していることから急反発の可能性の高い週となります。さらに、来週(5/8~5/12)の相場を占う4月28日週が+18.9%と、2週連続でプラス圏に浮上していることから堅調相場が予想されます。ただ、先週は本来、急落すべき週でしたが、日米の不自然な株価吊り上げを行ったことで、今週の急反発の可能性は小さくなったかもしれません。以前から『今回(23年3月20日週-57%→3月27日週62.9%)のように同指標が2週間で「下限ゾーン」から「上限ゾーン」へと乱高下したのは、22年3月28日週+41.2%→4月4日週-76.9%以来で、やはり年度末の株価吊り上げの「株価操縦」が行われていたことを証明したかたちです。実際、当時の日経平均を振り返ると、22年3月28日週高値28281円から5月9日週安値25688円まで-9%と、年度末を境に下落しています。ちなみに、21年の年度末は、21年4月5日週高値30208円→5月10日週安値27385円まで-9%と22年と同じかたちとなっています。』と指摘してきたように反動安が表れやすい時間帯であることは忘れないことです。一方、3月10日の米地銀シリコンバレーバンク(SVB)の経営破綻を起点とする世界的な金融不安は、全米14位のファースト・リパブリック銀行(本店・カリフォルニア州)が4月24日発表した1~3月期決算で約1000億ドル(約13兆4000億円)の大規模な預金流出があったことが明らかになり金融システム不安が再燃、米財務省や連邦準備制度理事会(FRB)など金融当局は28日、同行を支援するための緊急協議を始めたが銀行救済には世論の反発が予想されるため米中堅行の「第3の破綻」となる可能性が強まったかたちです。そのため、『3月半ばには債券恐怖指数MOVE指数が2008年以来の高水準に達し、株式と債券の恐怖指数の格差が15年ぶりの大きさ』で、『MOVE指数-VIX指数』は4月24日週117.75と、2008年の「リーマンショック」前に似た債券・株式市場の乖離が表れています。今年2月に『2018年に起きた「ボルマゲドン」のようなボラティリティーの急上昇を招きかねない』と指摘していたJPモルガン・チェースのマルコ・コラノビッチ氏は4月24日の顧客向けレポートで、『市場心理の指標であるシカゴ・オプション取引所(CBOE)のボラティリティー指数(VIX)は「異常に低い」。最近の低い変動性はオプションの売り手が市場を支配している結果で、他のオプション市場や高い短期金利、足元のマクロデータと比較すると、VIXは「ずれた位置にあるように見える」。「これは異常であり、現在の低いVIX水準が長く続くとは考えにくいとわれわれはみている』と再度警告しています。一方、『日経平均とのほぼ一致指標である「買い(レーティング1と2)」「売り(レーティング3と4)」銘柄比率』が23年3月3日週+28.6%→3月10日週+44.3%→3月17日週+18.6%→3月24日週-51.4%→3月31日週-20.0%→4月7日週-4.3%→4月14日週-8.6%→4月21日週+1.4%→4月28日週+10.0%と、23年3月24日週に「-40%の下限ゾーン」に急落後、2週連続でプラス圏に浮上しています。一方、株価底入れサインに重要な同指標の移動平均は、23年3月3日週+29.8%→3月10日週+33.6%→3月17日週+28.8%→3月24日週+15.0%→3月31日週+7.1%→4月7日週+2.6%→4月14日週

-3.6%→4月21日週-10.7%→4月28日週-12.1%と、3週連続でマイナス圏に陥っています。株価底入れサインとなる「-40%の下限ゾーン」実現にはまだまだ時間がかかりそうですが、その原因は無駄な「株価操縦」をいつまでも続けているためです。日米の株価操縦のなか、2023年4月20日ブルームバーグニュースは『米株強気派、過去100年の景気後退を度外視—相場急落は時間の問題か』において、『1929年以降に米国が陥ったリセッション全てに目を向けると、株式相場の急落は起きるかどうかわけなく、いつ起きるかが問題だということが示唆される。過去約100年に、景気が縮小局面に入った後で新たな底値を付けるのを回避したという例は一度もない。相場が底打ちするのは、リセッションが始まってから平均で9カ月後である。アンドルー・ガースウェイト氏からクレディ・スイス・グループのストラテジストは「リセッションが始まる前に相場が底を付けたことはこれまで一度もない」と18日付レポートで指摘。24年1—3月(第1四半期)までに米国がリセッションに陥る確率を80%とみている。』と報じています。現在の日米の相場操縦を行っている連中は「過去100年の米国の相場の法則」を覆そうとでも思っているのかが今後の注目点です。

今週は、経済指標では、国内は、5月1日に日・製造業PMI(4月)、日・消費者態度指数(4月)、一方海外では、5月1日に米4月ISM製造業景気指数、2日に米3月JOLT求人件数、欧4月ユーロ圏消費者物価コア指数、3日に米4月ISM非製造業景気指数、米4月ADP全米雇用報告、4日に中国財新4月製造業PMI、欧3月ユーロ圏生産者物価指数、5日に米4月雇用統計、中4月財新サービス業PMI、欧3月ユーロ圏小売売上高、などが予定されています。5月5日発表の米4月雇用統計では非農業部門雇用者数は前月比+17.5万人、失業率は3.6%の見通し。このほかのイベント・トピックスとしては、国内は、5月3日に株式市場は祝日のため休場(憲法記念日)、4日に株式市場は祝日のため休場(みどりの日)、5日に株式市場は祝日のため休場(こどもの日)、海外では、5月1日に欧・英・香港・株式市場は祝日のため休場(メーデー)、中・株式市場は祝日のため休場(労働節、3日まで)、2日に豪・オーストラリア準備銀行(中央銀行)が政策金利発表、米・連邦公開市場委員会(FOMC)(3日まで)、3日に米・連邦公開市場委員会(FOMC)が政策金利発表、米・FOMC終了後、パウエル連邦準備制度理事会(FRB)議長が記者会見、4日に欧州中央銀行(ECB)が政策金利発表、5日に米・セントルイス連銀総裁が講演、などが予定されています。FRBは5月2-3日のFOMCで0.25ポイントの利上げを決定すると予想されています。

RU-RD指標と日経平均（週末終値）



4月17日週	4月24日週	5月1日週	5月8日週
¥28,564.37	¥28,856.44		
33.30%	-3.30%	31.40%	18.90%

■■■ 今週の各指標の上値・下値メド ■■■

<日経平均>

上値メド 29167 円～29750 円 (+2%かい離)

下値メド 28508 円～27937 円 (-2%かい離)

<NY ダウ>

上値メド 34008 ドル～34688 ドル (+2%かい離)

下値メド 33466 ドル～32796 ドル (-2%かい離)

<ドル円>

上値メド 136.45 円～137.81 円 (+1%かい離)

下値メド 134.52 円～133.17 円 (-1%かい離)

<ドルユーロ>

上値メド 1.1115～1.1226 (+1%かい離)

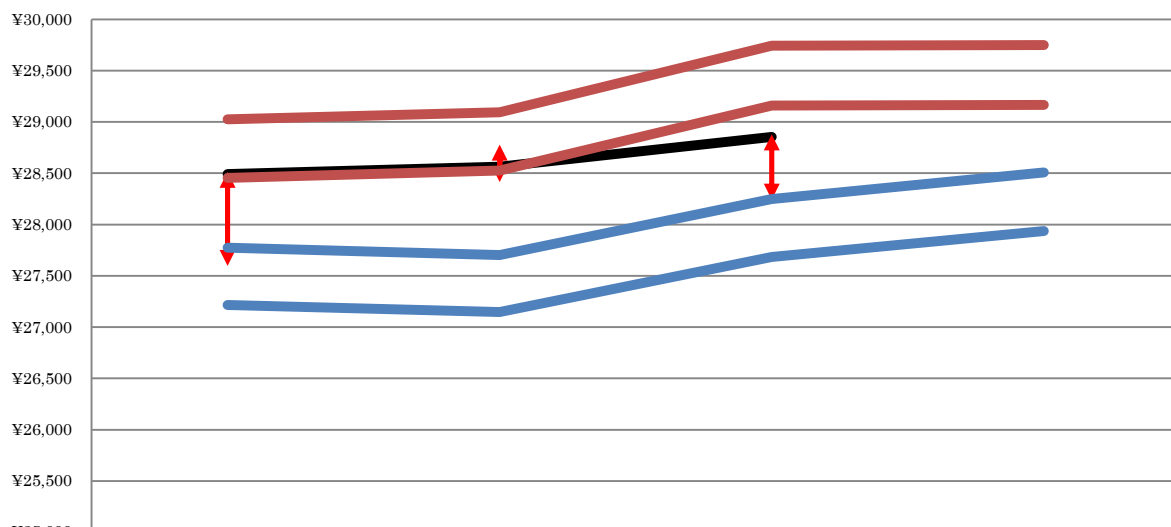
下値メド 1.0943～1.0833 (-1%かい離)

<ユーロ円>

上値メド 150.47 円～151.97 円 (+1%かい離)

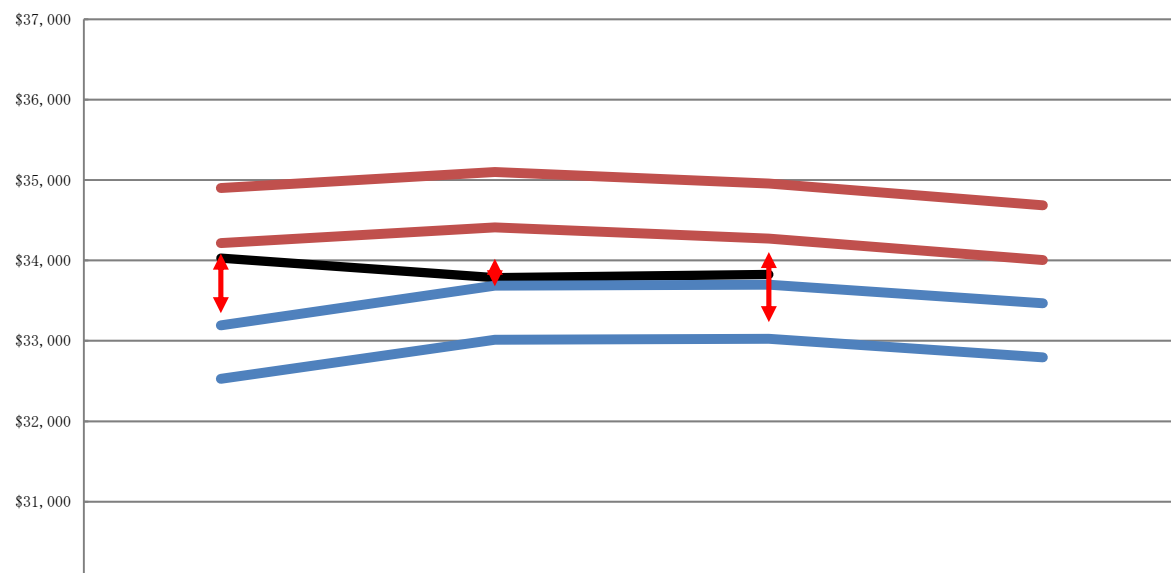
下値メド 147.97 円～146.49 円 (-1%かい離)

日経平均



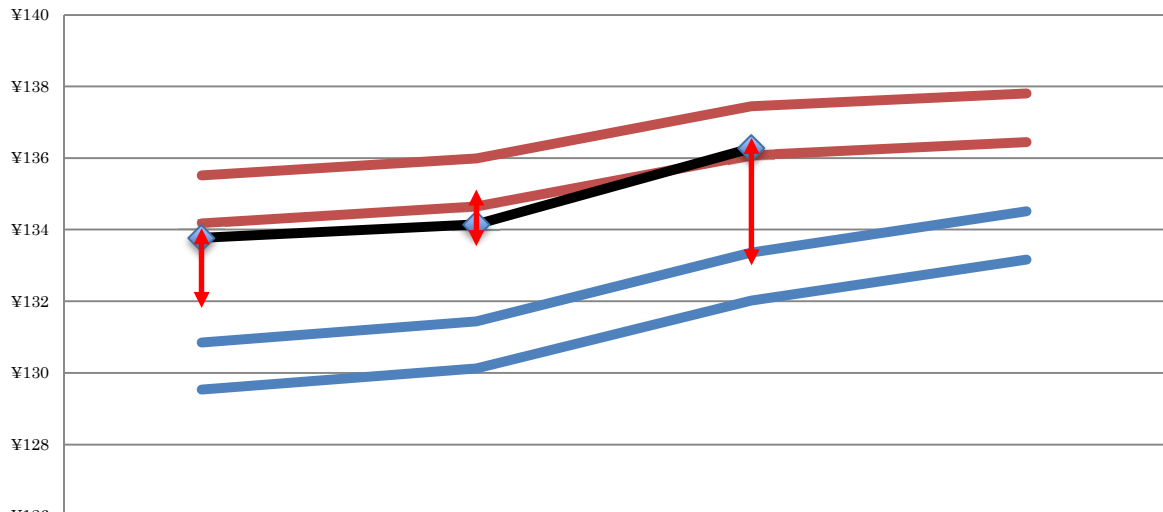
	4月10日週	4月17日週	4月24日週	5月1日週
● 日経平均	¥28,493.47	¥28,564.37	¥28,856.44	
● 高値	¥28,515.51	¥28,778.37	¥28,879.24	
● 安値	¥27,597.18	¥28,414.98	¥28,241.67	
● 上値上	¥29,026	¥29,095	¥29,744	¥29,750
● 上値下	¥28,457	¥28,525	¥29,161	¥29,167
● 下値上	¥27,773	¥27,703	¥28,248	¥28,508
● 下値下	¥27,217	¥27,148	¥27,683	¥27,937

NYダウ



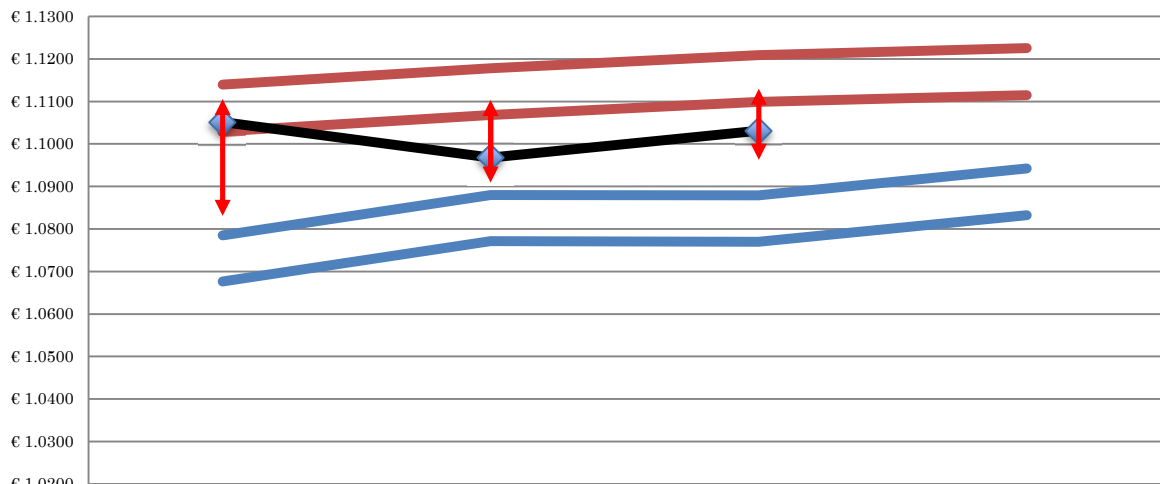
	4月10日週	4月17日週	4月24日週	5月1日週
● NYダウ	\$34,029.69	\$33,786.62	\$33,826.16	
● 上値上	\$34,898	\$35,101	\$34,956	\$34,688
● 上値下	\$34,214	\$34,413	\$34,271	\$34,008
● 下値上	\$33,193	\$33,687	\$33,700	\$33,466
● 下値下	\$32,529	\$33,013	\$33,026	\$32,796
● 高値	\$34,082.94	\$34,018.62	\$34,104.56	
● 安値	\$33,343.43	\$33,677.74	\$33,235.85	

ドル円

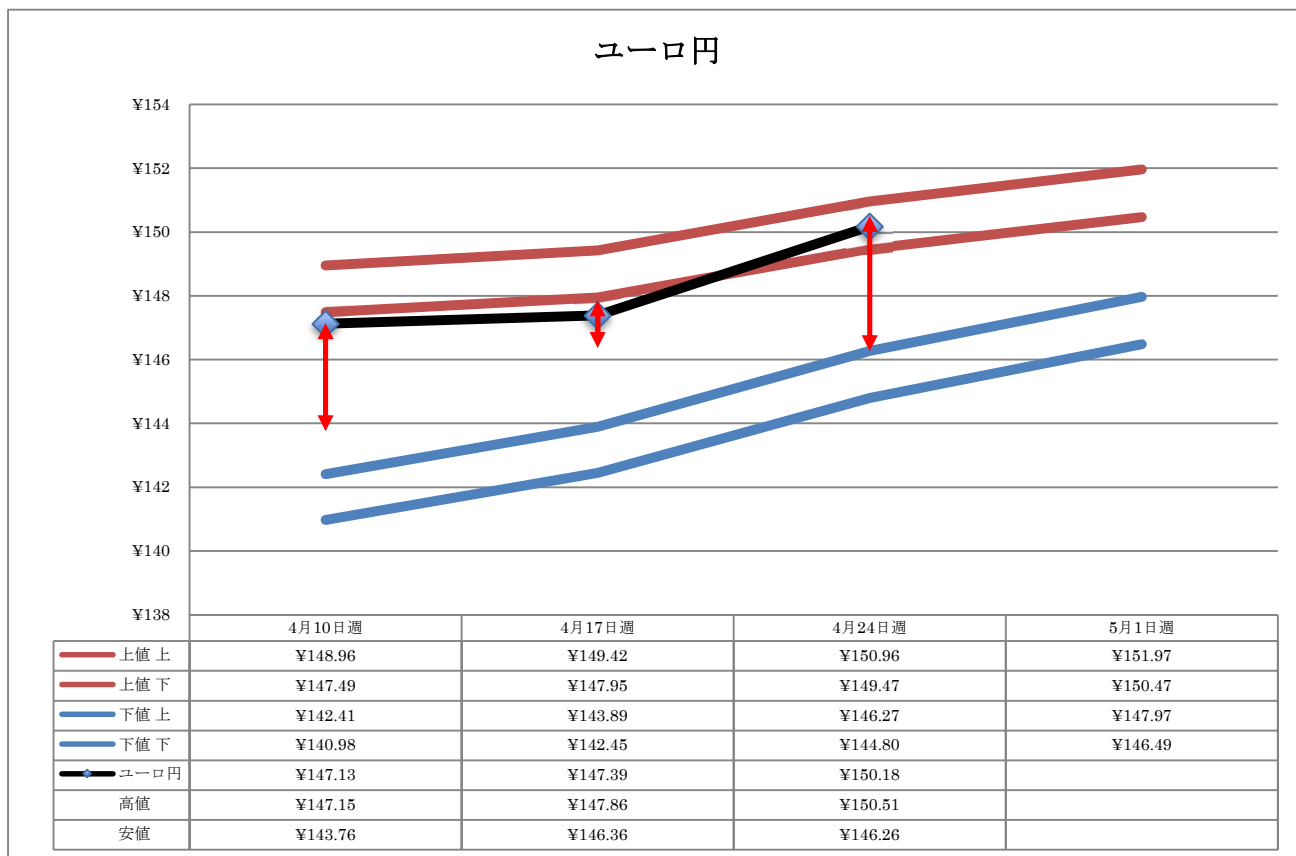


	4月10日週	4月17日週	4月24日週	5月1日週
上値 上	¥135.52	¥135.99	¥137.44	¥137.81
上値 下	¥134.18	¥134.65	¥136.08	¥136.45
下値 上	¥130.85	¥131.44	¥133.36	¥134.52
下値 下	¥129.54	¥130.12	¥132.02	¥133.17
ドル円	¥133.77	¥134.15	¥136.28	
高値	¥134.04	¥135.12	¥136.56	
安値	¥131.82	¥133.54	¥133.00	

ドルユーロ



	4月10日週	4月17日週	4月24日週	5月1日週
上値 上	€ 1.1140	€ 1.1178	€ 1.1209	€ 1.1226
上値 下	€ 1.1030	€ 1.1068	€ 1.1099	€ 1.1115
下値 上	€ 1.0785	€ 1.0880	€ 1.0879	€ 1.0943
下値 下	€ 1.0677	€ 1.0771	€ 1.0770	€ 1.0833
ドルユーロ	€ 1.1052	€ 1.0968	€ 1.1032	
高値	€ 1.1106	€ 1.1104	€ 1.1131	
安値	€ 1.0832	€ 1.0909	€ 1.0963	

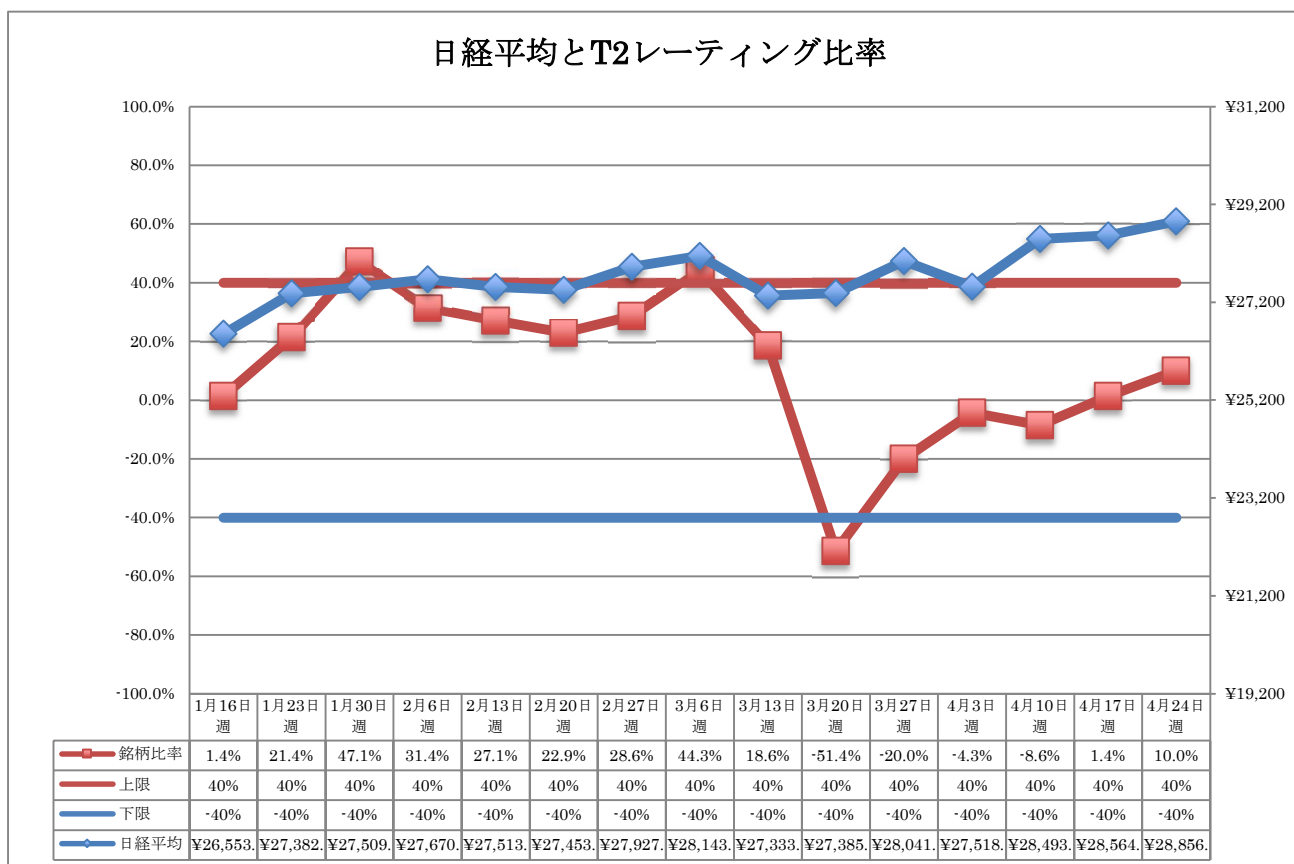


■■■ レーティング変更 ■■■

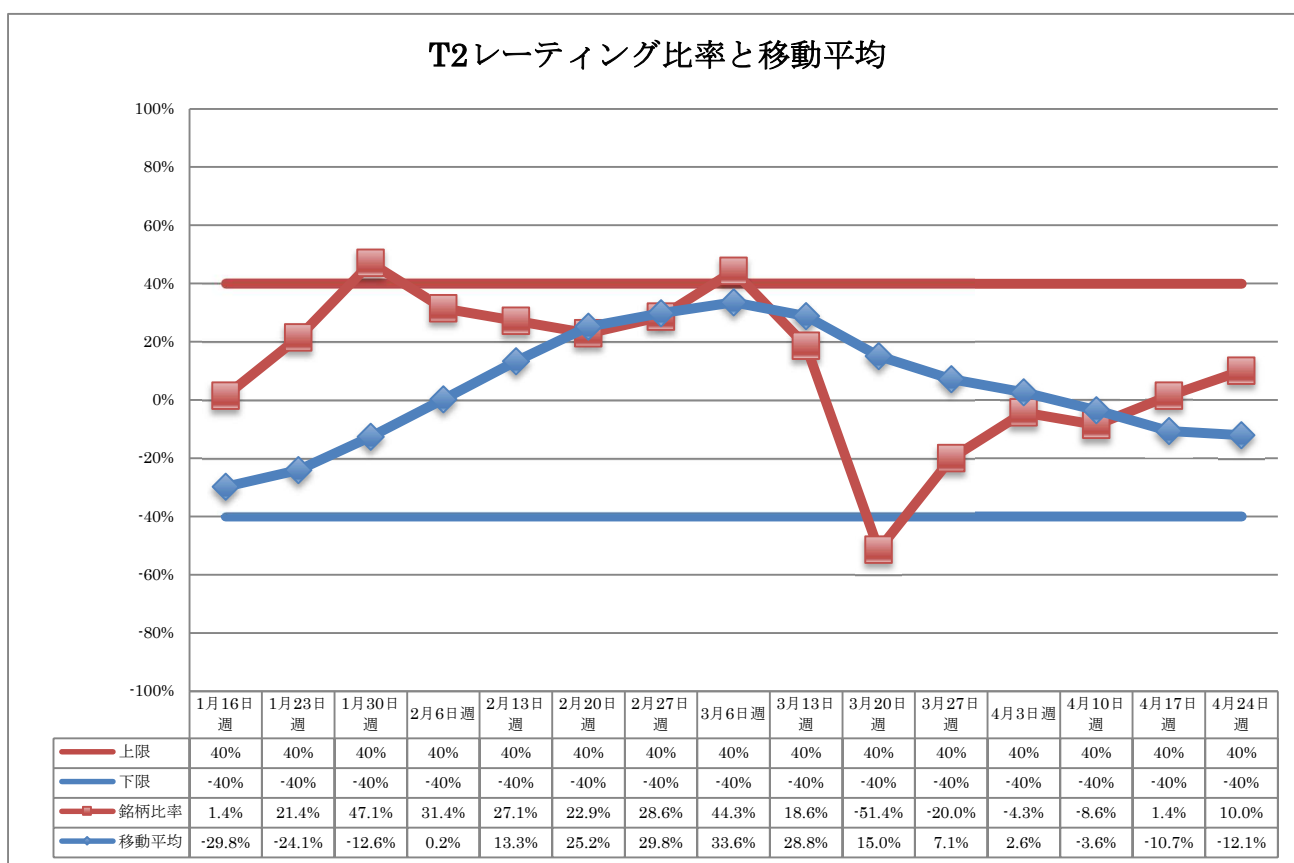
同指標は日経平均に多少先行しますが一致指標。同指標は、23年3月3日週+28.6%→3月10日週+44.3%→3月17日週+18.6%→3月24日週-51.4%→3月31日週-20.0%→4月7日週-4.3%→4月14日週-8.6%→4月21日週+1.4%→4月28日週+10.0%と、23年3月24日週に「-40%の下限ゾーン」に急落後、2週連続でプラス圏に浮上しています。一方、株価底入れサインに重要な同指標の移動平均は、23年3月3日週+29.8%→3月10日週+33.6%→3月17日週+28.8%→3月24日週+15.0%→3月31日週+7.1%→4月7日週+2.6%→4月14日週-3.6%→4月21日週-10.7%→4月28日週-12.1%と、3週連続でマイナス圏に陥っています。株価底入れサインとなる「-40%の下限ゾーン」実現にはまだまだ時間がかかりそうですが、その原因は無駄な「株価操縦」をいつまでも続けているためです。日米の株価操縦のなか、2023年4月20日ブルームバーグニュースは『米株強気派、過去100年の景気後退を度外視—相場急落は時間の問題か』において、『1929年以降に米国が陥ったリセッション全てに目を向けると、株式相場の急落は起きるかどうかわけなく、いつ起きるかが問題だということが示唆される。過去約100年に、景気が縮小局面に入った後で新たな底値を付けるのを回避したという例は一度もない。相場が底打ちするのは、リセッションが始まってから平均で9カ月後である。アンドルー・ガースウェイト氏らクレディ・スイ

ス・グループのストラテジストは「リセッションが始まる前に相場が底を付けたことはこれまで一度もない」と18日付レポートで指摘。24年1-3月(第1四半期)までに米国がリセッションに陥る確率を80%とみている。』と報じています。現在の日米の相場操縦を行っている連中は「過去100年の米国の相場の法則」を覆そうとでも思っているのかが今後の注目点です。

※以下のT2レーティング比率で目先の天井(40%超)、底(-40%超)を予測



※以下の T2 レーティングの「移動平均」で中長期的な天井(40%超)、底(-40%超)を予測



□発行元:塚澤.com 運営事務局

□ご意見・ご感想:info@tsukazawa.com

※免責事項※

「塚澤.com 今週の T2経済レポート」は、

株式会社ライブグラフィック(以下、当社)が提供するレポートです。

これらの情報によって生じたいかなる損害についても、当社は一切責任を負いかねます。

提供する全ての情報について、当社の許可なく転用・販売することを禁じます。